

## よく努力し、大きく成長した2学期でした。

思いがけず早い寒波の到来で、雪の降る寒い日が続きました。皆様に於かれましては、ご多忙の日々をお過ごしのことと思います。平素は聖母の小さな学校の教育にご理解ご協力をいただき、深く感謝いたしております。

コロナ禍の中、社会はコロナと共に生きる道を探っていますが、社会の中で(学校の中で)居づらさ、生きにくさを抱えている子どもたちは、リモート・オンラインとICT化が進めば進むほど、人と生(なま)に触れる体験が減ることで、人との交わりの方の積み重ねができず、新たな生きづらさを持つようです。社会はICT化の中、益々忙しく、生きづらさを持った者たちは社会から取り残される、あるいは問題にもされず、片隅に追いやられるのではなからうか、ひきこもってしまう若者が増えているように思えます。また、本校への不登校の相談も増えています。小学生は学校とつなぎ、中学生は個別の相談に応じています。

さて本校も、2学期の終業を迎えます。コロナ感染の拡大する中、「学校の新しい生活様式」に添って学びをした学期でした。マスク、消毒、換気の中、生徒たちもしっかり状況を心得、積極的に学びました。この2学期において生徒たちは特に10月のスポーツフェスタでは、テーマを決めるために不登校の自分を丁寧に愛情を持って捉えました。このことは、「自分を見つめる」本校の教育の第一歩です。一ヶ月にわたって今の自分について考え、仲間に伝え、更に考えるという学びは自分について新たな気づきを得たり、仲間の発言に共感したり、客観的に考えられたり、今までとは違う考えが少し出てきたようでした。「一人である」のではなく、「仲間と共に」学ぶことの大きな意味がここにありました。自分を否定することなく、ありのままの自分をつかむことができました。そして、その気持ちを次のように表現しました。「現実の自分を見たくない。現実の自分を見るとつぶれそうで怖い。自分だけ先が見えない。怖くて真っ暗でした。」「自分の中での葛藤や死にたいとしか思えない時、苦しくて悲しい気持ちを誰にも言えず、辛かった」などです。こうして生徒は、自分が学校へ行きづらいことの核心に少しずつ触れてゆきます。人との交わり方、また、自分自身の気持ちの整理の仕方、行動の整えなど、生きていく術(すべ)を学びます。その中で「週2日=半日」あるいは「1日2時間の授業に出席」と、原籍校へ少しずつ通えるようになった生徒もいます。また、親子行事への参加や通常の聖母への登校が増えた生徒もいます。いずれもが生徒の大きな成長です。社会的自立に向けて、日々の意識や努力があったから遂げられました。よく頑張った2学期でした。また、高校3年生になっている卒業生2人も大学に合格したと報告してくれました。希望を持って高校生活の締めくくりをしています。不登校の時に自分の不登校から学び、課題をこなし、人間の基礎を身に付けたいと思います。2学期も多くの先生方にお世話になりました。ありがとうございました。



12/5「鯖街道を歩く」2回目

### <今学期お世話になった先生方>

茶道(青木 妙子 先生:コロナ禍で中断中)

華道(山中 知昌 先生)

陶芸(舞鶴市陶芸館)

音楽(北浦 弘治 先生)

珠算(西野 啓子 先生)

校外学習(大久保喜基先生・笠原 昌明 先生)

体育(渡邊 弘 先生)

数学(江宮 文夫 先生・稗田 靖彦 先生)

校外歴史学習(山下 正 先生)

中国語(舞鶴市国際交流員:コロナ禍で中断中)

家庭科(横林 千寿子 先生)